京都の民主運動史を語る会
会　報
2022年3月31日
第253号
（隔月刊）
題字　住谷悦治

燎原

燎　原　社
（京都の民主運動史を語る会）
代表　井口和起
事　務　局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅33-302　井手幸喜
〒606-8107
tel & fax075（722）3823

日本最古の公立植物園

京都府立植物園は戦後平和の象徴

川端康成の小説『古都』にも書かれている〈楠の並木〉（植物園の南門から入って左側）

「兵（つわもの）どもの夢の跡はいっさい要らない。持って帰ってもらおう」――とは、いかにも蜷川虎三知事らしい物言いだと思います。

これは、今の京都府立植物園が、敗戦後間もない1946年（昭和21）、駐留した連合軍によって取り上げられ、米軍家族の住宅地にされました。当時、2万数千本あった樹木の7割が伐採され、水生植物の池は干し上げられ、景観は大きく壊されました。

それが契約上、全面返還されることになったのは1957年（昭和32）。当時の蜷川知事にとっては、何とも忌々しいことだったのでしょう。『府会だより』資料版の195号（1957年3月1日）に、知事の言葉は「文化施設を軍靴で踏みにじった者に対するやるかたない憤懣が吐かせた言葉、府民のすべてが心に思っていたことでもあったた」と記しています。完全撤収されてから再開園までにさらに4年を費やしました。当時

【声明】ロシアのウクライナ侵略に断固抗議する、プーチンは直ちに戦争をやめよ！　3
『丹後の教育』前夜の教育運動 ―一九六〇年代の危機と運動の多様性　富山　仁貴　4
【余滴】小説『舞鶴湾の風』によせて　菱崎　博　8
『タカクラ・テル物語』（小田切明徳）掲載にあたっての解題　佐藤　和夫　10
木村京太郎さんの思い出 ― 復刻『水平社運動の思い出』に関わりながら　茹　立明　12
近年の二著にふれて思い巡らすこと　寺井　治夫　13
【資料】全国水平社100周年アピール　15
事務局から・催しもの案内・編集後記　16

【京都の民主運動史を語る会】年会費（会報代とも）3,000円　郵便振込口座　01060-7-15762　加入者名　燎原社

いつまでも京都の誇り、人々の憩いの場として…

の貴重な写真が植物園会館の事務室前にありました。

川端康成の小説『古都』に、植物園がたびたび登場しています。

《植物園はアメリカの軍隊が、すまいを建てて、もちろん、日本人の入場は禁じられていたが、軍隊は立ちのいて、もとにかえることになった。

西陣の大友宗助は、植物園のなかに、好きな並木道がある。…

「あの楠は、どないなってるやろ。」と。機の音のなかで思うことがあった。まさか占領軍に伐り倒されてはいまい。宗助は植物園が、ふたたび開かれるのを待っていた》

もともと植物園は１９２４年（大正13）に開園されました。間もなく１００年になり、公立の植物園としては、日本でもっとも古い歴史を持っています。古いだけではなく、職員や専門家など園を挙げての弛まない努力と工夫によって、現在、国内最多の保有植物種類（１万２千種類、12万本）を有し、36ヶ国、１２９園に１０１種分譲、17ヶ国、31園から導入するなど、その植物栽培管理技術力は世界的にも高い評価を受けています。

また園内には山本格二、山崎正義、杉本尚、江里敏明ら著名な作家の彫塑が13点在。洛中に在りながら北山連峰、比叡山が人工物にも遮られず眺望できるロケーションの素晴らしさも京都ならではの誇りといえます。

「生きた植物の博物館」が府民だけでなく、訪れる人たちすべてが歓迎される憩いの場で在りつづけてほしいと願わずにおれません。

（記・出渕とき子）

【声　明】

ロシアのウクライナ侵略に断固抗議する、プーチンは直ちに戦争をやめよ!!

2022年3月5日

京都の民主運動史を語る会　世話人及び編集部一同

2月24日、ロシアのプーチン大統領はウクライナのＮＡＴＯ加盟を阻止するとして、突然ウクライナへの一方的な軍事侵攻を開始しました。しかも、原発施設や非戦闘員のウクライナの人々をも戦渦に巻き込むという恐るべき蛮行を継続し続けています。国連憲章と国際法に照らして明らかに不当かつ不法な「侵略戦争」です。直ちに、かつ無条件に、侵略戦争をやめ撤兵すべきです。

　このロシアの隣国への侵略を以て、北朝鮮の核弾道ミサイルの発射実験や中国の台湾侵攻の可能性、「台湾有事」を想定し、敵基地攻撃能力の保有や、アメリカとの核共有の必要をあおる元総理をはじめとする日本の体制翼賛会的政治勢力は、具体的な改憲の動きを強めています。まさに、ロシアの侵略を天祐とする「危機便乗型」策動といわなければなりません。

　私たちは、１９３１年の満州事変から、翌年の満州国の傀儡政権樹立、そして華北分離工作を続け、１９３７年の盧溝橋事件による日中全面戦争にいたった過去を思い起こします。いま、改憲をあおる人々は、15年間つづいた「アジア・太平洋戦争」を、当時の呼称「大東亜戦争」と呼ばせ、ＡＢＣＤ包囲網による経済封鎖でジリ貧から逃れるための「自衛戦争」であり、かつ欧米の植民地支配から「アジアを解放する戦争」だったと教科書に書かせようとし続けている反動的な政治勢力です。

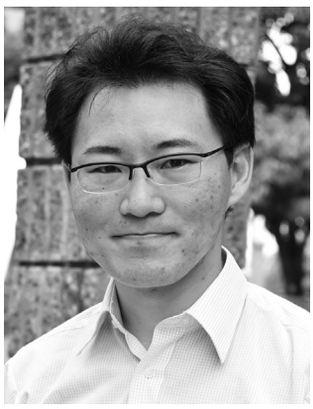
　ロシアのウクライナ侵略は、１００年前の日本軍国主義のアジア侵略を思い起こさせます。侵略をやめさせる道は、あらゆる国際紛争を話し合いで解決する「国連憲章」の精神と、憲章に通底する日本国憲法前文、そして「憲法九条」の力を発揮することです。過去の過ちを再び繰り返すようなことがあってはならないと考えます。

　歴史を掘り起こし、歴史を記録し語り続ける運動に取り組む私たちは、ロシアによるウクライナ侵略に断固抗議し、平和的な解決に向けた取り組みを希求します。

「丹後の教育」前夜の教育運動

――一九六〇年代の危機と運動の多様性―

富山　仁貴
（兵庫県立大学非常勤講師）



一九五八年以降、京都府丹後地域の教育運動は対立と危機の連続であった。とくに一九六四年、運動と地域の緊張関係はピークに達する。「峰中事件」である。

同年九月十四日、峰山町議会の場で、ひとりの教育委員が「峰山中学校の教育は正常とは認めがたい」と発言した。これは、保守系議員による「峰山中学校の偏向教育について」という質問に対する返答であった。つまり教育委員の発言は、同校の教育が「偏向教育」であると認めたことを意味した。この件は一部の新聞記者に事前にリークされ、町議会の模様は新聞にも取り上げられることとなった。

この事件は、「丹後の教育」として知られる一九七〇―八〇年代の丹後地域の教育運動の前史にあたる六〇年代に起きた。強力な教職員組合と社会運動のネットワークを基盤として多彩な運動を展開した「丹後の教育」にいたる道程には、行政・地域との鋭い緊張関係を抱えた危機の六〇年代があったのである。ここでは「峰中事件」に焦点を当て、「丹後の教育」前夜すなわち六〇年代の丹後地域における運動の様相を描いてみたい。

一、「峰中事件」の経緯

もともと丹後の教育運動は、全国的に特筆するほどの「強い運動」ではなかった。一九五〇年代の丹後では、他地域と同様に、行政・校長が主導する教員社会が成り立っており、教職員組合の組織率は約八〇―九〇％で校長層が幹部を占めていた。他方で、戦後改革によって新しい教育実践や文化運動が学校や地域に広がっており、そこに活動的な青年教員が関わっていた。時には突発的な事件で運動と地域とのあいだに緊張が生じることもあったものの、対立が長期化することはあまりなく、例外的な事態として見なされたと思われる。校長やベテラン教員の多くは、若い教員たちを見守りながら、普段の教育現場を運営していた。

しかし、一九五八年に風向きは大きく変わった。それ以前から、保守政党による教職員組合への攻撃や「教育の政治的中立」を定めた教育二法（一九五四年）の制定といった中央での動きはあったが、いよいよそれが地方の職場にまで波及してきたのである。一九五六年に改編された任命制教育委員会のもとで、文部省を頂点とする行政権力による教員社会の統制が図られた。具体的には、校長・教頭の地位強化と教員の勤務評定の実施などで、その背後には自民党の組合分断政策があった。かくして、一九五八年に勤務評定反対闘争（勤評闘争）が全国的に行なわれた。当初は校長層も闘争に関わって、勤評反対を主張したり運動を支援したりした。ところが、組合が事実上のストライキに及ぶと、組合員の足並みは乱れ、府教委の働きかけでほとんどの校長が組合を脱退した。その後、勤評処分撤回闘争や学力テスト阻止闘争などが続いたことで、教員社会のなかの対立や矛盾は顕在化し、組合と行政の対立は恒常化することとなった。組合側は一九五九年に組織を再編して奥丹後地方教職員組合（奥丹教組）を結成し、組合財政の確立と活動家の結集を図った。教育と運動で経験を積んだ青年教員が活動家層となって、その後の教育運動を支えてゆくことになる。一方、行政側は人事権を使って組合に対抗し、一九六三年からは組合が「不当人事」と見なすような人事異動が相次いだ。行政による脱退勧奨や行政処分も加わって、一九六三年時点で奥丹教組の組織率は六一％にまで落ち込むことになった［拙稿二〇二一］。（＝□は参考文献の略記。論文末を参照ください。＝以下同）

○　○

組合と行政の恒常的な対立は、運動と地域との緊張を高めることに繋がった。例えば、勤評闘争の直後には、久

美浜町で地区の役員を組合活動家に押し付ける「嫌がらせ」がなされた［渋谷一九八〇］。一九六一年の学テ闘争では、育友会（ＰＴＡ）との対立の末にすべての実施校で組合側は実力行使を断念した。五十河小学校や浜詰小学校では、地域の有力者によって動員された地区住民が逆ピケを張り、「労組や教員組合が来たら、校庭に牛を放して追い返す」、「学テに反対するやつは、すまきにして日本海にぶちこんでしまうぞ」と脅す一幕もあった［吉岡一九六四］。

さらに一九六二年には、網野中学校の学テ闘争をめぐって育友会を通じて組合非難や脱退勧奨がなされた。組合を脱退した教員には行政処分が下されなかったという［川戸一九八二］。翌一九六三年には、五箇小学校の教頭で奥丹教組委員長であった山田稔穂ら三名の転勤が発令された。地域からは五箇小の教育に対する非難の声が現われ、新聞は同校の「班・核・討議づくり」の教育実践を「偏向教育」とする記事を掲載した［吉岡一九六五］。

そして、一九六四年。「峰中事件」のことの発端は、九月議会での一般質問として、ある保守系議員が峰山中学校の教育を「偏向教育」と非難して教育委員会の見解を求めたことであった。すでに六月議会で、生徒の自治組織である青空会を「非行集団」として警察が調査をしている云々の議員発言があり、地域の保守勢力の一部は峰山中学校の教育に対して警戒の目を向けていた。件の質問に対しては、教育委員長代理として教育委員の一人が次のような回答を行なった。①峰山中学校の教育方針が掲げる「全面発達、科学的認識、集団主義」は教組の方針を取り入れたものであり、反政府的、反文部省的、反教育基本法的である。この教育理論は、マルクスからマカレンコに通じたソ連共産主義教育理論ではないか、②同校の生徒の言動にも多数の問題がある、③同校の教員三十名中、正常な教員は十指に満たない現状である等々――。町議会に来ていた記者の一部には、事前に話が通っていたらしく、後日この回答が新聞に掲載された。奥丹教組はこの一件を保守勢力によって仕組まれたものと受け止めて、組織を挙げて事件に取り組んだ［下戸一九六五］。

その当時、自民党は「教育正常化」を掲げて、各地で「偏向教育」批判を行なっていた。このキャンペーンによって栃木・岐阜・香川・徳島の教職員組合は壊滅的な打撃を受け、青森・富山・滋賀・島根などでも組織率が大幅に低下していた。京都府下でも京都市や舞鶴市などで組合分裂攻撃が起こり、一九六〇年代を通じて京教組の組織率は二〇％も低下した（文部省「教職員団体の加入状況に関する調査」各年版）。このように、この時期の教職員組合運動は、行政との対立や地域との緊張の高まりのなかで厳しい状況に置かれていたのである。「峰中事件」は、こうした情勢を象徴する事件として、その後も関係者たちによって語られることとなる［下戸一九八三など］。

二、運動の多層的なネットワーク

一九六〇年代の丹後の教育運動において、「峰中事件」はまさに危機のピークであった。しかしながら、運動そのものは崩壊せず、持ちこたえることに成功する。危機を迎えつつも運動を続けることができたのは、丹後の教育運動の背景に多層的な運動のネットワークが存在していたからである。すなわち、一九六〇年代の丹後では、さまざまな個人や団体からなる、地域における社会運動のネットワークが形づくられていた。丹後の学校教員たちもまた、多面的で粘り強い取り組みによって、このネットワークづくりに多大に寄与した。彼らは、学校のなかで教育指導や学校運営に努めるとともに、学校をこえたさまざまな教育団体・労農団体・平和団体・文化サークルなどに関わることで、教育運動の次なる展開を切り拓いてゆくことになる。

以下では、こうした丹後の教育運動の背景となった文脈について、①革新勢力の伸長、②国民教育運動の地域的展開、③教育研究運動の発展の三点に整理して述べてゆきたい。

○

第一の文脈は、丹後における革新勢力が伸長していたことである。一九五〇年代半ばから丹後各町の選挙では革新系の候補者が相次いで当選してゆくこととなる。革新系の候補者を中心となって支えていたのは労働組合で、奥丹教組は丹後における有力な労働組合の一つであった。一九六三年の府会議員選挙では、奥丹教組書記長を務めていた柴田勝が共産党丹後地区委員長として立候補し、落選はしたものの中郡選挙区（定数一）で一七・八％の票を得た。共産党がこれほどの得票にいたったことは初めてのことで、衆議院選挙であれば当選ラインに届く得票率であった。それゆえ、地域の保守勢力は奥丹教組に対する警戒をいっそう強め、そのことは「峰中事件」にも一定の影響を及ぼしたと考えられる。

柴田勝が共産党公認で出馬していることからも分かるように、奥丹教組は自身の教育運動と地域の革新勢力とを結びつけることに熱心に取り組んでいた。奥丹教組は運動方針のなかで「労農同盟」をとくに強調し、これまで未組織であった織物女工、農村部の山林・土建労働者、農民、被差別部落民にも積極的に働きかけていた［拙稿二〇二一］。とくに峰山中学校は、校長を除く全教員が組合員という「拠点

分会」であり、分会からは奥丹教組の副委員長と執行委員、中郡地労協書記長、峰山原水協事務局長、峰山平和委員会事務局長を送り出していた［下戸一九六五］。

もちろん、革新勢力のなかにも対立と矛盾は存在した。中央では社会党・共産党・民社党の対立が生じており、一九六四年の原水禁運動の分裂と同盟の結成は、丹後にも及んでいた。しかし、中長期的に見れば、労働組合は公務員（全逓・国鉄・食糧事務所・府職労・町職など）、民間（丹海バス・日本計算器・日進製作所・丹後中央病院など）ともに活発に活動しており、青年女性団体、文化団体、平和団体などと重なりながら、革新勢力はしだいに大きくなっていったのである。

○　○

第二の文脈は、日教組や京教組が提起した国民教育運動を、丹後の教育運動が独自に受け止めていたことである。すなわち、中央における総評や日教組の運動を、京都の運動がローカライズし、丹後の教員たちがさまざまな議論のなかで峰山中学校の教育方針を作り上げた。この動きは、「国民教育」というキーワードから説明することができる。

総評で「家族ぐるみ、地域ぐるみ」を掲げた高野実の影響のもと、一九五〇年代後半に日教組は狭い意味での労働組合運動をこえて保護者や国民を結集する「国民教育運動」を提唱した。日教組は上原専禄を運営委員長に迎えて国民教育研究所を設置し、「国民教育」の研究拠点とした。その後、日教組での高野系グループの影響力は衰えたものの、「国民教育」のスローガンは受け継がれ、それぞれの組合や教育現場で多様に受け止められることとなった。

京都では、共産党の影響力が強かった京教組が、反帝・反独占の国民運動の一環として「国民教育運動」を再解釈した。一九五九年の教研六月集会の記念講演で、共同研究者の一人として細野武男（立命館大学法学部教授）は、

教師が父母の教育要求をくみ上げ、政治の民主化と教育の実践を通じて具体的な運動を進めてゆくことを提起した。一九六〇年には京教組が中心となって、「国民教育」の研究拠点として京都教育センターを設立した。センターには代表の細野武男をはじめとした民科京都支部や末川博（立命館大学総長）の関係者が集まり、京教組からは旭丘中学校事件の関係者である寺島洋之助や山本正行らが関わった。京都教育センターは国民教育論を独自に発展させることに取り組み、その成果は翌年の教研五月集会での細野武男の講演に結実した。講演は「国民教育」の目標、内容、方法として「全面発達、科学的認識、集団主義」（三つの原則）を提起しており、当時のマルクス主義教育学の議論を反映したものと思われる。これを受けて、京教組も三つの原則を教育研究活動の基本方針に掲げた［拙稿二〇一九］。

峰山中学校が教育方針に掲げていた「全面発達、科学的認識、集団主義」は以上のような経緯を持つ言葉であった。その意味で、「峰中事件」における同校の教育方針に関する教育委員の指摘は、おおむね事実であったと言える（それが「反政府的、反文部省的、反教育基本法的」と評価できるかはともかくとして）。ただし、日教組・京教組の運動方針が奥丹教組や峰山中学校にそのまま反映されたわけではない。むしろ、丹後の学校教員たちが教育運動や教育実践のなかで直面した葛藤と模索のなかで、彼らの取り組みを価値づける言葉として「国民教育」や「三つの原則」を選び取ったと考えるべきであろう。

○　○

第三の文脈は、丹後における教育研究が組合活動家の関与のもとで発展していたことである。実際に、峰山中学校の教育実践は、全国的な教育研究運動の成果を丹後の学校教員たちの議論をへて取り入れられたものであった。奥丹教組が教育研究運動を支援したことは、丹後の教育運動にとっても重要なことであった。なぜなら、革新勢力の一員として労働運動を行なうことは、行政との対立や地域との緊張をもたらしていたが、教育実践についての研究活動であれば、教育運動は行政・校長と協力することや地域と結びつくことが可能であったからである。

さて、学校教員たちの手による教育研究は、戦前以来、行政・校長の主導のもと職場―町村―郡市段階で組織され、学校をこえた教員のつながりを形

づくってきた。戦後になって多彩な教育研究会や自主的教育サークルが相次いで生まれ、教職員組合が主催する教育研究集会が大規模に開かれた。奥丹教組が一九五九年に結成されると、教育研究集会もこれまでより広い「奥丹後地方」（中郡・竹野郡・熊野郡）をエリアとする規模の大きな自主的集会となった。

一九六〇年代に入ると、「奥丹後地方」にまたがる大規模で自主的・継続的な教育研究団体が登場するようになった。もっとも代表的なのが、奥丹生活指導研究会（奥丹生研）である。中心となったのは下戸明夫、田中道夫、藤村祐三、吉岡時夫をはじめとした奥丹教組の活動家たちであった。彼らは奥丹後―京都―全国の教研集会を通じて学校をこえた生活指導の研究を進めるなかで、全国生活指導研究協議会（全生研）の支部づくりを決意したという。当時、全生研は「班・核・討議づくり」を提起しており、五箇小学校や峰山中学校で実践された。新聞が「偏向教育」と非難するにあたって槍玉に挙げたのは、こうした生活指導の取り組みのことであった［吉岡一九六五］。

このほかにも、教科別・課題別の研究団体が丹後各町で活動していた。その多くは町教委および校長会と繋がる官製団体であったが、教育実践の力量を持った活動的な教員たちも関わっていた。これらは一九六〇年代後半になると、丹後同和教育研究会（丹後同研）や奥丹後社会科教育研究会（奥丹社研）といった校長から活動家までを包括した有力な研究団体へと発展することになる。丹後同研は、映画『橋のない川』（ほるぷ映画、今井正監督、一九六九年）の上映運動に取り組んで成功を収めた。奥丹社研は、渋谷忠男や吉田三郎ら郷土全協系のメンバーと下戸明夫や吉岡時夫ら歴教協系のメンバーとの連携によって、その後の「地域に根ざす社会科」へと取り組みを進めてゆく。両団体の経緯からは、これらの研究団体が全国的な教育研究運動とも繋がっていたことが理解できよう。奥丹教組はこの動きをバックアップして、教育研究を通じて行政・校長との関係を再構築する手がかりを掴んでいった。

三、行政・地域・運動の関係再構築へ

ここまで「峰中事件」の経過と事件の背景となった文脈――革新勢力の伸長、国民教育運動の地域的展開、教育研究運動の発展を取り上げた。丹後の教育運動が対立と危機の六〇年代をくぐり抜けるうえで、こうした地域における多層的な社会運動のネットワークが有効に働いた。ある活動家の表現を借りれば、丹後の教育運動にとっての一九六〇年代とは、「教育活動と組合活動と地域の労農運動の統一」に向けた模索過程であったと言えよう［吉岡一九六四：七一頁］。

一九六〇年代前半では対立と緊張関係を抱えていた教育運動と行政・地域との関係は、六〇年代後半になると変化が訪れる。ちょうど、高度成長とその終焉によって、核家族化や過疎化、農林漁業や地場産業の不振が起こり、地域社会のあり様が根本から変わろうとしていた。教育分野でも、学校統廃合問題、学力・進学問題などで行政と地域とのあいだに緊張が生じるようになった。この時、奥丹教組は教育研究を通じて行政・校長と組合の関係を対等なものと認めるように働きかけるとともに、地域における社会運動のネットワークを活かして地域にも働きかけた。つまり、行政・地域・運動の関係を変革し再構築することに取り組んだのである。

さらに、一九七〇年代になると、教育実践の面でも丹後の教育運動は高く評価されるようになる。川上小学校の生活実態調査に基づいた「地域にねざした教育」、虎杖小学校の僻地教育実践、峰山中学校の「目標学習」、丹後各校での到達度評価実践などが相次いで登場したことで、これらの教育実践を「丹後の教育」と呼ぶようになった。

教育学者の小林千枝子氏は、「丹後の教育」とは、地域社会のあり方が根本的に変わって子どもの成長・発達過程が問い直されていたときに、「地域」の価値と「戦後民主主義」の理念を教育のなかに意識的に位置づけた教育実践であったと評価する［小林二〇一四］。これに対して、本稿で筆者が強調したのは、「丹後の教育」前夜の時期において、丹後の学校教員たちがそれらの価値や理念に向き合う前提として、多面的で粘り強い取り組みを通じて地域における多層的な社会運動のネットワークを形づくっていたことである。なお、その中心的な担い手であった学校教員には、学生時代に戦争を経験し、敗戦後の新教育のなかで教員生活を始めた者が多かったことも、最後に補足しておきたい。

京都府丹後地域に広く深く根差した社会運動の歴史に思いをめぐらせるとき、本稿が描きえたことはわずかな一断面にしか過ぎない。今後のさらなる研究によって、《地域に生きる人びとの社会運動》としての「丹後の教育」、あるいは戦後日本社会のなかの「丹後の教育」について、読者諸賢に実りある成果を届けることを決意して、本稿を締めくくる。

【おもな参考文献・史料】

川戸利一「地域を変革し地域に根ざす教育を求めて――奥丹後の教育運動」（青木一ほか編『教育実践辞典5　地域に根ざす教育』所収、あゆみ出版、一九八二年）
小林千枝子『戦後日本の地域と教育――京都府奥丹後地域における教育実践の社

余滴　小説『舞鶴湾の風』によせて

菱崎　博

作品は近代日本がアジアへ向け帝国主義的な侵略を試みた中で、最も重要な国家事業の一つであった舞鶴湾における軍港建設に関り、その歴史に置き去りにされていた人々を書いたものです。

『舞鶴湾の風』を描くに至る経緯

齢（よわい）七十を過ぎた今、目を閉じ六〇年前を思い返せば、貧しかった少年期がよみがえってきます。

私が生まれ育った故郷は、京都市内の未解放部落の西三条でした。六歳の頃、両親が離婚して私たち兄弟三人は、母一人の労働で育てられ成長しました。貧しい暮らしの中、楽しさと人とのつながりを求めた私たちは、地域の子供会や青年会に参加していきました。春のハイキングや海水浴、盆おどりやクリスマス大会、楽しかった思い出の中に青く痩せた少年期の私が立っています。

そして、青年期に立命館大学の学生の指導を受け、部落解放運動へと深く関わっていきました。

当時の部落解放運動を取りまく状況は「同和対策審議会」の「答申」への評価や「同和対策事業特別措置法」に絡み、利権を求めようとする集団と、地域住民を主体にした自主的な要求運動を進めようとする集団との諍いが、地域住民の暮しの中に持ち込まれていました。そうして、組織の分裂を招くのですが、京都に端を発した部落解放運動の分裂は、同和対策事業が始まると同時に全国へと拡散していきました。

私たち部落解放運動に結集する京都の青年は、その対立の中で大きく揺れながら成長しました。そんな中、何が原因していたのかその理由はわからなかったのですが、京都府下で唯一舞鶴市内にだけ「解同」朝田派の支部の存在がなく、当時の三木一平委員長を代表とする府連傘下の支部による住民要求運動が展開されていました。私の中で舞鶴地域の存在が深まっていった理由です。半世紀以上前のことです。

封建的身分支配の強化の中で形成されていった身分制と集落は、明治の改革を迎え新たな段階に突入しました。が、当時の社会的な資本経済の未発達な現実が、その後、長らく部落住民に差別と貧困・無権利という苦しみを背負わすことになるのです。

当然のことですが、国家・軍隊、何より資本の集結と労働力の大量移動は、封建制の幕藩体制の中では決してあり得ないことです。従って私は、舞鶴での荒田部落を始め幾つかの支部が存在した集落が、封建制社会で形成された歴史的な社会背景を持った地域であろうことを、疑いもしませんでした。

近代化の中の部落問題

明治三十年代に着工した舞鶴湾の軍港建設には、国家的な財政の投入と圧倒的な労働力の集結を必要としていました。その移動の結果、明治三十七年ごろ荒田部落が山間の傾斜地に、また長浜、北浜、白鳥、奥市場などの地に

会史』（学術出版会、二〇一四年）
下戸明夫「峰中闘争について」（京都教育センター『教育運動』第六号、一九六五年）
――「奥丹後の峰山中学校の実践」（山田正敏・三尾明編『中学校教育実践選書46　地域に根ざす教育』所収、あゆみ出版、一九八三年）
渋谷忠男「地域学校物語Ⅰ」（地域と教育の会『地いきと子ども』第六号、一九八〇年、地域と教育の会蔵）
吉岡時夫「奥丹後の教育運動（1）闘いの歴史とその教訓」（『教育運動』第四号、一九六四年）
――「奥丹後の教育運動（2）生活指導研究運動を中心に」（『教育運動』第五号、一九六五年）
拙稿「いま、戦後日本における地域社会運動の歴史を研究するということ」（『新しい歴史学のために』第二九三号、二〇一八年）
――「戦後京都における国民教育論の展開と「丹後の教育」の発見」（桂島宣弘ほか編『東アジア 遭遇する知と日本』所収、文理閣、二〇一九年）
――「戦後日本における教員社会の展開と地域社会運動――京都府丹後地域の青年教員の動向を中心に」（『ヒストリア』第二八九号、二〇二一年）

軍都建設と新たな部落形成の史実を追って

因幡からの移住者を含む集落が形成され、それが旧身分制社会の「エタ部落」として迫害差別されていったのです。

私は明治の代、即ち、搾取形態の異なる資本主義社会にあって、一般の市民や労働者が含まれている集団がどのような物質的条件が作用し新たなエタ部落として、舞鶴の軍都で形成されたのか。全く理解することができませんでした。

また、多くの研究者の調査報告などを読み、話を聞くも、納得できる明確な回答には出合えませんでした。そして、その糸口も判らないまま、いたずらに時が過ぎていきました。

明治とはどのような時代だったといえるのだろう。封建的な土地所有制度と前時代的な因習を色濃く残しながら、資本主義的な国家形成が試みられた時期でもあります。そして、至極当然ではあるのですが半封建的な地域支配体制の中で、圧倒的な国民の生活は貧窮を余儀なくされていました。

大日本帝国憲法を背景に侵略を意図した舞鶴湾の軍港建設は、無権利で過酷極まりない労働によって進められ多くの犠牲者を出しました。であるならば、その労働支配と搾取の中に私のテーマの理由を求めなければならない。との思いに至ったのです。

まさに、近代化は差別の解消を保証するものではなかったのです。

軍都舞鶴の歴史

一方、全国部落解放運動連合会舞鶴地区協議会議長の坂根正一さんや浦田鉄蔵さん、私のよき指導者で部落解放運動の先輩でもある舞鶴荒田支部に所属されていた今は亡き元舞鶴市議の田岡喜作さんや、移住二世の山内重夫さん、大幾政義さん、移住三世の中野博さんに、両親・祖父母から何度となく聞かされたという移住当時の話を聞かせていただきました。

二十数年前、田岡さんがお元気なころ『舞鶴の歴史を風化させないためにも、物語として書き残したい』。私は田岡さんと山内さん、大幾さん中野さんを前にして、自身の思いを表明し、期待の言葉と了承を得ました。それ以降、私と顔を合わせるたびに『無理をしないで、少しずつ進んでください』と、田岡さんは声をかけてくださいました。そんな田岡さんがお亡くなりになったと聞かされた時、私の中に衝撃が走りました。そして、ようやくこの物語を書こうと私はペンを執ったのです。

当時はまだ不十分な知識しかなかった私ですが、小説という手法を駆使し歴史の解明に迫るべく、懸命に挑戦しようと誓いを立てたのです。幸いにも二〇一四年の秋、公益社団法人部落問題研究所の成澤榮壽理事長よりお声を掛けていただき、二〇一六年四月号から、この物語を月刊誌『人権と部落問題』誌上に連載することになりました。

取材の旅での不思議な体験

遡れば一世紀以上前、因幡の若き移住者たちも見たであろう砂丘に立ち、日本海の潮騒を耳に刻みながら海からの風を受け、舞鶴湾へと足を運びました。私はその時の舞鶴で、実に不思議な体験をしました。

移住当時の話を調べていくうちに、いつも頭から離れない気がかりなことが大きく膨らんでいったのです。それは、谷に住み着いた当時の移住者たちは、労働災害で亡くなった仲間の埋葬を何処にしたのだろうか、ということです。私は、舞鶴の関係先へ案内していただいた藤岡氏にその思いを伝え、谷の墓地への案内を申し出ました。

墓地は谷の西の端に立つ旧荒田隣保館の道を挟んだ前の山の急斜面にあり、頂上に向かって人一人が通れるほどの一本の急勾配の道が作られていました。その道の左右に、段々畑のように墓石が並んで建っています。私は息を切り、汗を流して急斜面を登りました。頂上に着くと山の奥に向かって、獣道のような跡が鬱蒼とした木々の中へと続いています。私は何かに導かれるようにして奥へ向かいました。すると小さな空き地のような所に出ました。空き地の東端に石があり、その前方にだけ木が取り払われています。私はその場に立って湾を見下ろしました。その時です。

―あっ！―背後で風が流れたように感じて私の背筋が凍り付きました。

―もしや、ここが―私は体を震わせ確信しました。

また、初めて谷間に小屋を建てて暮らしたのが原田卯太郎さんという方で、その場所は今も残っていて家の横の細い通路を通って裏へ行くと、五、六メートルほどの高さにわたって、山肌の削り跡が生々しく残っていました。おそらく谷に暮らすための作業の痕跡であろう。そんな取材の日々でした。

出版後の暖かい励ましの紹介と続編への期待

連載終了後。三ヵ月に及ぶ推敲の後、二〇二〇年十二月に東京の「本の泉」社

より出版しました。

年明け初頭から、埼玉県にある映画製作会社代表の桂荘三郎さまをはじめ民主主義文学会の仲間、元参議院議員の平野貞夫さまから暖かい励ましのお手紙をいただきました。さらに元参議院議員の西山とき子さまが「(蟹工船)・(夜明け前)・(地底の歌)が思い出され、涙が止まらなかった。小説『舞鶴湾の風』は作者が身を削り、渾身の力を込めた、あらゆる差別と闘う二一世紀の道標となった」。

舞鶴の荒田地区の近くで生活されていた、滋賀県大津市在住の浪江宏子さまは「舞鶴での思い出は尽きませんが、晩年にこのような感動的な本に出会えたことは奇跡に近いことです」。

日本民主主義文学会関西ブロック会議代表の田村好男さまは「読後思ったことは『舞鶴湾の風』が世界史的な性格と意義を持っているということであった」。

向日市在住の石田陽子さまは「女性読者として美代子というキャラクターを生み出した著者に心から拍手を送りたい気持ちです」。

東京都練馬区在住の評論家の松井活さまは「部落問題の小説という範疇を遥かに超え、日本の近代史における民衆の大河小説と呼べるような、スケールの大きな骨太の作品である。作品全編に、民衆の社会運動の前史を担った祖父母の世代の人たちへの作者の慈しみと敬意が溢れている。優れた作品である」など、実に多くの方から評価と励ましが届き、中には続編の要望が記されていました。

早いもので出版してから一年が過ぎたのですが、私自身、思いもよらない反響に、喜びをかみしめています。

ご承知のように、今年は全国「水平社」創立百年を迎えます。

日本の民主主義の実現をめざし、命がけで闘った多くの人々の努力で、部落問題は基本的に解決を見ていますが、政権交代を保障する市民と野党の共闘を展望する時、部落問題を利用した新たな分裂策動に、私は警戒を呼び掛けるのです。

資本は常に巧みな差別と分断によって、より巨大化を目指すからです。

閉じるにあたり

私が部落解放運動の中で求めた命の尊厳と平等の獲得は、闘いを抜きには実現しないものです。

長年にわたり関わってきた部落解放運動、その中で出会いご指導を頂いた多くの先輩諸氏、日々心より感謝を述べると共に、過酷な歴史を生き抜いてきた多くの民衆に敬意を表し、本紙面に発表の機会を与えて頂いたことに感謝いたします。

※『舞鶴湾の風』(2200円+税・送料)
株式会社「本の泉社」℡03―5810―1581 東京都文京区水道2・10・9 板倉ビル2F

『タカクラ・テル物語』掲載にあたっての解題

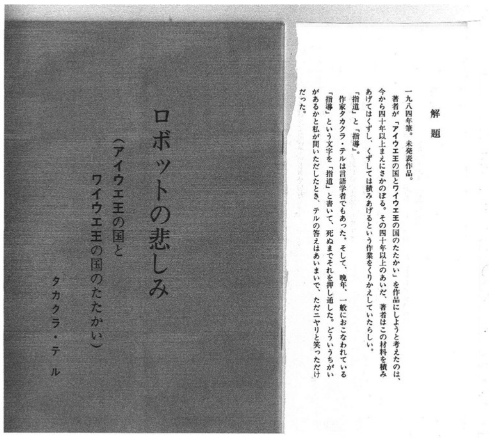
本会顧問 (小田切明徳)

文責 佐藤 和夫

(1)、本会の顧問である小田切明徳さんは、「山宣」研究家として性科学分野で色々実績をあげてこられました。同志社校では「歩く性教育」と学生・生徒からも尊敬を集めていました。また、薬害エイズの救済などの社会運動にも貢献されました。小田切さんの配偶者は、治安維持法の犠牲者でもあった北牧孝三さん(立命大卒・元共産党南区京都市議)の娘です。岳父北牧さんが1980年代に治安維持法犠牲者を中心とする「旧友クラブ」のメンバーと語りあって「京都の民主運動史を語る会」を発足させ、会報「燎原」の発行に小田切さんも協力して来ました。その後、小田切さんも「燎原」世話人にくわわり、執筆者となりました。小田切さんは「山宣」を若い人にも知ってもらうために、「劇画山本宣治」(1989年・つむぎ出版)の監修を佐々木敏二さんといっしょに引き受けました。「山宣の青春物語―山本宣治カナダ時代の軌跡―」(2006年・宇治山宣会刊)を樺 朗(kamba ro)のペンネームで発表しました。若い人に読んでほしいとの願いを込め、「山宣譚」(2009・つむぎ出版)を山本宣治生誕120年・没後80年記念として出版しました。人呼んで「山宣」オタクともいうべき小田切さんが、「タカクラ・テル」のことも青年向けにそ

の足跡を語りたくなったのはある意味で必然性を感じます。小田切さんがほぼ10年前に完成させていた「テル伝」（2012年）の論考を配偶者孝子さんが書斎の中でみつけてくれました。

わたしは小田切さんに日本プロレタリア文学全集（新日本出版刊）のタカクラ・テルを貸した経緯があり、小田切さんがタカクラ・テルを書いているのは承知していました。その小田切さんが頭痛を訴え京大病院に入院手術などを繰り返し、自宅でリハビリ生活に入りました。ペルパーさんに助けられて散歩されているのをよく見かけ、「高倉輝、まとまりそうですか」などと能天気に声をかけていました。孝子さんが見つけた原稿はA4（28字×18行・185ページ）ですが、ただし60ページ以降のみで前半がまだ見つかりません。しかも、P97～P17（Aバージョン）とP60～P185（Bバージョン）の二種類あります。再録するにあたり、長い方が補強されたものとしてとりあえず採用することにしました。



（2）、では、そもそも「高倉テル」という歴史的人物は、どういう人だったのか。ネタバレをおそれず、素描すると―。

高倉テル（1891・4・14～1986・4・2）高知県生まれ。三高・京都帝大英文学科（1916卒）、新村出教授の下で1922年まで嘱託。河上肇の影響を受けマルクス主義に接近。1929・3・5、妻ツウ（津宇）の従弟の山本宣治が刺殺され、上京して山宣の葬儀に列席した。1933・2月長野県教員赤化事件で検挙され、控訴審で2年執行猶予3年の判決を受けた。1935年頃より国語国字問題を研究した。農業生産力向上のため共同組合・水利問題を研究し、小説「大原幽学」を書いた。1939年唯物論研究会及び言語運動により検挙された。1942年ゾルゲ事件の宮城与徳の関係で自首し、2か月後に釈放。1944年11月に八王子の久保田農場を指導した件で検挙されたが、警視庁から脱走し、哲学者の三木清に一晩世話になったりしたが、三木は逃亡幇助の疑いで逮捕され、1945年9月26日、豊多摩刑務所に拘留されて獄死した。

高倉テルは、豊多摩刑務所を10月1日に釈放された。

1946年4月の総選挙で日本共産党から立候補し衆議院議員となったが、48年10月占領軍政策違反の疑いで占領軍に逮捕された。また、50年6月の参議院選挙全国区から当選したが、翌日占領軍の指令で公職追放された。治安維持法違反で4回、占領軍からの弾圧2回の被害者だった。彼の小説や戯曲などは小田切さんの「タカクラ・テル物語」を味読したもらいたい。今回掲載するのは、作品の位置づけの理解に資するため、終章部分を先行させることにした。エピローグは以下のとおり。

○エピローグ

テルの伝記については、私より先に、山野晴雄さんが手がけて来た。時期を同じく出版ができれば、それぞれのテル像が提出されて、総じてテルの生涯とその作品の再評価ができる事が一番よろしいかと思った。

私は数年前に『山宣譚』（山本宣治伝）を出した。その関係もあり、長野山宣会に関わり、秋の碑前祭に参加して来た。ところが、まだテル伝が出されてないことを知り、残念に思っていた。そこで私の所属している同志社大人文研の場で、高倉輝の研究を発表する作業から始め、長野山宣会への取材、作品の読み込みなどを続けて来た。

理論社創業者の小宮山量平、長野山宣会会長平林茂衛を始めとする長野山宣会のみなさん、四国の取材でご協力いただいた皆さんや前進座や雑誌『葦』のテルの無署名論文について作家の早乙女勝元らの東京の関係者の方々からの取材のご協力を得た。深謝致します。

○テルの中国やロシアの足跡をたずねてみた。

その1）吉林州の日本人学校の校長をやっていた時、その学校で主事をやっていた方をたずねた堀口さんを富山に訪ねた。「タカクラさんは校長をやっておられ、よく碁を打たれた」当時のソ連から帰った後か、行くときか詳しいことは分かっていない。中国内も人民公社の見聞をして、延安訪問にも出かけたそうである。その時の経験をもとにして、長編小説「たまをあらそう」（1962年・理論社）が書かれた。

その2）他方、関西での党の中央委員をやられた方と話を伺う予定で連絡をしている途中に、ある事情のためにキャンセルになった。こうした人はまだ他にもおられた

その3）手紙の問い合わせ：無返答

これは張竜と李竜を主人公にした新中国建設の物語である。黄河と揚子江を舞台にした社会主義建設をめぐるス

トーリーで私的には評価したいが、読んでみて、テルの作品でも円熟度の高いものと思う。

テルはこうしたキャリアを積んできたから、日中友好運動でも会が大変な時に中央の会長を引き受けている。

稀代の悪法と呼ばれた治安維持法とレッド・パージでアメリカ軍政部に拘束され、遺言状まで書き、アメリカの軍政部からの不当な逮捕拘束を撤回させた。この2大事件は、まだ未解決のままで賠償も関係者への名誉回復の措置は取られていない。それだけにテルの先駆的で、厳しい闘いは称賛に値する。

四国、京都、長野での取材で集まった資料は多数あり、それを充分に活用できず残っている。いずれ、「タカクラ・テル全集」とか「テル著作集」の実現の際に活用できればと思っている。

近年の二著にふれて思い巡らすこと

寺井　治夫

本誌世話人の一人・奥西正史に、知人の寺井治夫氏から近年発刊の話題書2冊を取り上げた評論文を含む私信が2月に寄せられました。寺井氏の許可を得て，今号に部分掲載させて頂きます。掲載に当たり、寺井氏の略歴も組み込みました。

１９４３年、富山県に生まれ、京都大学卒業後も京都市内に在住。中高一貫の私学男子校で国語科教員として勤務。90年代前半に中学・高校での男女共修家庭科を設置するカリキュラムを作り実施する必要が生じた時、偶然類似する学校に勤務していた寺井氏と奥西の研究交流が始まっていましたが、今は新英語教育研究会や教育科学研究会でご一緒することが増えています。

『京都宇治原子炉　世界初の反原子力住民運動の記録』

『京都宇治原子炉　世界初の反原子力住民運動の記録』〔玉井和次＋宇治原子炉設置反対運動史研究会・著、群青社刊、２０２１年〕を拝読致しました。

本庄豊先生が書かれた序章は秀逸です。宇治が研究用原子炉を設置する候補地になったこと、それを住民の運動によって撤回させたこと、今はそれが全く忘れられていることを授業実践を通して読者に伝えます。一章から七章までが文献を根拠にしてそのことを示しているのに対して、序章「うちらの街に原子炉が来る」は、どういう背景の中で考えるべきかを、読者に分かりやすく教えています。この本を最も読んでほしいのは、あなたたち青年諸君なのですよ、というメッセージも発せられています。

「うちらの街に原子炉が来る」とはどういうことか、当時の市民の側から述べたものとして最も明快な言葉は、川上美貞氏が国会で意見陳述をした全文です。市民にとって「原子力」は未知の世界であるとの立場をとりながら、科学・研究者と市民との繋がりと対峙を明確に述べています。〈「科学」は失敗を重ねつつ仮説を検証していくもの、ミスの可能性を受けいれての安全策の保証が要る。また、「研究者」の論に耳を傾けて学ぶが、市民に判断・行動を求めるときには精一杯一致した見解を持してほしい。〉

住民として声を高く上げねばならないもう一つの事情がありました。明治以来宇治木幡・五ヶ庄に設置されてきた火薬製造所が半世紀余の間に六回も爆発事故を起こして、住民被害も一

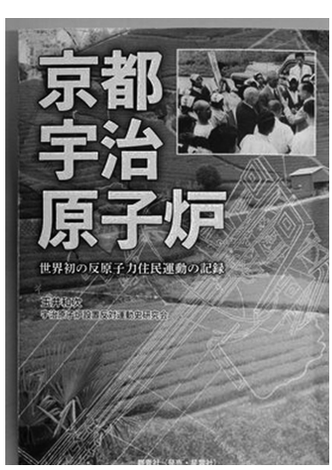
度ならずあったことです。もういい加減にしろよという怒りがあります。ここで注目されるのが、火薬の火と原子力の火とが別物ではないという見方です。真実を衝いていると思います。そして地元民として事故の全てが人為的なミス・失策によるものであることを見抜いています。原子炉設置が地域の暮らしと産業を危機に陥れるという訴えが、理に沿ったものとして説得力を持っています。最近で言えば、中村哲氏の国会での意見陳述を思い起こします。

川上美貞氏が奥様のお祖父様というお話をお聞きしました。八章で、奥様の奥西知子さんの文章を拝読致しました。お祖父様のご活躍を全くご存じなかったこと、ネットを繰って陳述文に出会ったことなど、興味深く読みました。お父様が岩井忠熊氏であることもお聞きしていました。岩井氏の著書が私の書棚に一冊あります。二〇一四年刊『十五年戦争の京大学生運動』です。中井正一の関連で買い求めた本です。言い遺しておかねばならない思いで満ちています。

湯川秀樹をはじめとした科学者の国への不信感・警戒感が、川上美貞氏の意見陳述にも反映しているように思います。正力松太郎（富山県西部・実家の選挙区の議員です）の画策は、政治家の欲しい物を科学者に作らせる、それも今すぐに、安く値切って、なのではないかという不信感。いろんな意味で命が懸かる大事業において「予算」が正当に配分されないことは、その事業が成り立たないことだ、という思いが科学者に強くあります。科学行政、教育行政等、今も私たちにこの不信感が続き、ため息が出ます。槌田劭氏の回想では、一九五四年度予算案は中曽根・正力の無定見なものであったと述べています。「思いだけが先行したドタバタ劇」。日本学術会議総会決議にある原子力研究三原則（民主・公開・自主）に、最初から背を向けていたことが指摘されています。

研究原子炉設置反対運動がどうして宇治の人たちに忘れられて、歴史の闇に眠ったのか、やはり気になります。奥西知子さんの文章ではこう述べられています。

祖父川上美貞をはじめ、この「運動」を担った人たちには、自分たちが「歴史を動かした」とか「自分たちが世界初」などと云う意識はまったくなかったでしょう。だからこそ誰もこの出来事を語り残そうと思わなかったのだろう、彼らの心の内にあったのは自分たちのささやかな暮らしや仕事の平穏を守りたい、ただそれだけだったのだろう、だから誰もそのことを語り残そうと思わなかったにちがいないと初めて合点がいったのです。



確かにそうだったのだろうなと思います。市井の人は自分の力を過信することがないでしょうし、済めばあっさり日常に戻ります。見方によっては無欲で、あるいはあまり見通しを持たないと言えるかもしれません。しかし実はかなり有効に力を使い、強い思いを実現しています。この市井の人のありようも大事なものに思えます。大事な力ではないかと思います。近年「語り部」と呼ぶ活動が進んでいるようですが、これも市井の人の知恵と意志であるように思います。ただこのような市井の人たちの運動を『宇治市史』が記載しなかったことが気になります。町の人に忘れられたことを利用した人もいたのではないかと疑います。宇治原子炉の記憶の在り方を「その後」としてたどれないものでしょうか。この住民運動は、その後に世界各地で展開されたという反原発運動と並び合い照らし合うものであると、この本から教えられたように思うのです。

中西伸二氏の文章で、現在京大が宇治キャンパスに核融合エネルギー開発を進める装置を持つことが述べられています。核融合エネルギーは最近話題になっています。この研究の方向で今日までの半世紀を歩む可能性があったのかなと夢想します。熊取の研究所ではどのように歩んできたのか、私は不勉強でまだ知りません。東の研究所＝茨城県東海村の東大原子炉がいつも日本の原発五四基と繋いで話されます。東と西の研究原子炉は、これからもどんな役割を発揮するのでしょうか。いろんな興味がわき、考えさせられます。

『広辞苑は何故生まれたか　新村出の生きた軌跡』〔新村恭著、世界思想社刊、２０１７年〕もとても面白く、少しずつ時間をかけて読ませていただきました。楽しんだと言えます。意外と最近の本ですね。お祖父様新村出氏の生涯を、敬意と愛情を込めて、孫の恭氏が丁寧に書いています。恭氏の二十歳の年にお祖父様が亡くなられています。父親猛氏を中に挟んで考えると、恭氏にとって出氏はやや遠い存在

『広辞苑はなぜ生まれたか　新村出の生きた軌跡』

だったかなと想像します。恭氏は祖父を比較的相対化しやすい位置にいたと言えるでしょうか。そして祖父の著書だけでなく、夥しい手紙・手記などの文献的史料を読む過程で身内の人たちの歴史とも符合した理解が進みます。本の帯で三浦しおん氏が新村出の人柄を「チャーミング」と書いていますが、恭氏も同じ思いを持っているのでしょう。本当に楽しく読めます。権威性を漂わせるイメージから解放されて『広辞苑』を受けとめることができます。

明治当初のいろんな実情が見えて、興味が尽きません。俄仕立ての「小学校令」がなかなか定着するものでないことが、出の「小学校」時代の記述からよく分かります。特に知識人へと育つ道の実際が語られていて、勉強になります。明治二年に京都が番組小学校を一斉に始めた事情は、やはりかなり特殊なものだったのです。三年前京都新聞社から『御苑に近き学び舎に』という小説が出版されましたが、当時の番組小学校開設の歴史的経緯がかなり調べられていて、面白い作品です。また、西川祐子著『花の妹　岸田俊子伝』でも明治初期の京都の教育事情が分かります。いずれも漢学者が動員されての事業です。しかし武士階級の子弟が歩んだ一つの道が、この本で具体的に分かりました。

言語学（国語学）について、上田萬年以前のことが少し分かりました。そして江戸時代の研究成果がそれなりに大事にされていたことも確かめられました。このことは時枝誠記の『国語学史』で幾分か知っていましたが、私の頭の中で一層繋がった感があります。

新村出が大学の図書館長を長く勤めたこと、それを楽しんだことは予想外でした。権威性や名誉欲からかなり自由だったのでしょう。自らの研究心に素直に向き合っていた姿が想像されます。確かに新村出にとっては京都が居心地良かったのでしょう。戦争中の苦労は子息猛氏の拘禁に堪えたことでしょう。このことは中井正一らの『世界文化』弾圧の裏面ですが、多くの研究者がその人なりに節を持すことに心を砕いたことが偲ばれます。

書名の割に『広辞苑』を直接語るページが少ないことに不満を覚えますが、出の生涯を語る三分の二がそのための序章だと思わねばなりません。戦時体制下での複雑な出版事情が絡んだ辞書編纂の歴史は決して普通のことではなくて、幾つもの条件が折り合って生み出されたことが分かります。使命を兄から託されたこともありましょうが、恭氏自身が『広辞苑』のことを切に語りたく思う気持ちが分かるような気がします。なお、辞書は言語学の分野ですから、国語学者の名が多く出てきます。濱田敦先生をはじめとして、私が大学で接した国語学系の先生方がほとんど登場しています。就職に際して紹介状を書いてもらった遠藤嘉基先生もその一人です。懐かしい思い出も湧いてきます。

というわけで、とても楽しく読ませていただきました。有難うございました。

木村京太郎さんの思い出

――『復刻　水平社運動の思い出』に関わりながら――

茁　立明（弁護士）

私は、１９６７（昭和42）年から3年間、右京区鳴滝の音頭山の国立療養所を望む鳴滝川の西沿いの新興住宅地に建売を買って住んでいた。3人目の子どもが生まれた直後であった。隣家には、学生アパートを経営されて管理人を兼ねておられた木村京太郎さんご夫妻が住んでおられた。直ぐにも親しくお付き合いさせていただいた。奥様は、生まれたばかりの私の長男をわが子のように慈しんで下さった。

僕は当時、第一法律事務所の弁護士として、中小企業の労働組合弾圧事件で多忙を極め、妻は小学生と幼稚園に通う長女と次女の世話に明け暮れしていた。木村さんご夫妻には随分お世話になった。

京太郎さんは部落研に通っておられたが、自宅では、読書、書き物と2階の表に面する部屋の窓辺で夜遅くまで机に向かっておられた姿を思い出す。

研究所の人達がよく出入りされ、会議などをされていた。三木一平さんも良く来られていた。国民救援会の難波英夫会長も時々お見えだった。その時

は、木村さんと一緒に僕の家までこられて全国のいろんな救援闘争の話をされた。

木村さんはご高齢であった。東京の住井すゑさんを訪ねて上京され、お別れの挨拶をされて来たとお聞きした記憶がある。奈良にもよく出かけられ部落解放同盟の旧友たちとの交流の話も良く聞かせていただいた。

一番尊敬している人は、西光万吉さんと何時も言われていたことを思い出す。奈良の郷里の近くに西山卯三先生の設計で解放記念碑を建てる計画のお話もお聞きした。

先日、全国水平社１００周年記念事業実行委員会の依頼で、木村さんのご著作再刊の同意を得にご子息の故光一氏の未亡人がご在住の筈の旧宅（鳴滝）をお訪ねしたが、長期ご不在の様子で会えなかった。福王子までの帰途、近くの浄土真宗大谷派・了源寺（通称・大根炊き寺）に立ち寄った。当時、12月の報恩講の日には大鍋で炊いた大根を頬張った記憶がある。玄関口には親鸞聖人の80歳台の旅姿の銅像が立っていた。事歴では、建長４（１２５２）年冬、上人が愛宕山の麓の月輪寺に参拝の途次、立ち寄られ村人達が大根を炊いてもてなしたとのことである。菅笠、蓑着、脚絆姿の黒光りした上人像は寂び寂とした印象であった。

（２０２１年11月５日記）

【資料】全国水平社創立１００周年記念アピール

全国水平社創立１００周年記念事業実行委員会

１００周年を迎える意義

２０２２年3月3日は「全国水平社」創立からちょうど１００年となります。全国水平社は、封建的身分差別の残滓としての部落差別の解消をめざす自主的運動団体として組織され、創立大会が京都で開催されました。創立宣言は、人間の尊厳・自由・平等を求めて、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と結んでいます。以後１００年を経て、生活環境や労働、教育での周辺地域との格差の解消が進み、結婚や居住を含む自由な社会的交流の進展が地域社会でみられるなど、差別的言動を受け入れない市民道徳の形成が進んできて、社会問題としての部落問題は、最終的解決を見通せる段階に到達してきています。ここに至る経緯と到達点と教訓を国民的な達成として共有し、現在の社会に存在する様々な差別や人権の諸問題の解決に挑戦していく新たな連帯の出発点として、１００周年を迎えたいと思います。

１００年の歩み

水平社運動は、欧米の平等をめざす社会変革の運動、国内での米騒動や労働・農民運動そして大正デモクラシーなど人権と民主主義をめざす諸運動の高揚のなかで誕生しました。水平社に集う人々は、厳存していた生々しい差別への怒りと人間の平等への渇望を核にして活動を展開してきました。戦時下では、きびしい弾圧により運動が一時的に窒息させられました。

戦後には、基本的人権の尊重を定めた日本国憲法のもと、部落問題の解決を求める運動が民主的な教育運動や各種の民主運動と連携しつつ発展しました。また高度経済成長による人口移動と産業構造の変動は地域での古い因習を解体し対等な人間関係を形成する条件となりました。国による同和対策事業の実施は、住環境や職業や教育における格差を是正し、差別の解消と社会的交流の促進に大きく役立ちました。同和行政施策の実施過程で利権や暴力と結びついた逆流が一部に生まれました。それと向き合う中から部落問題にふさわしい解決（格差是正・差別解消・部落内外の交流）のあり方が「国民融合」論として提起され、運動の前進とともに行政のあり方も改善されてきました。特別施策が廃止され、残る問題は一般行政施策と、人権尊重・民主主義定着の運動に引き継がれるようになりました。

こうして部落差別を許容しない今日の民主主義社会を築いてきたのです。これは国際的にも誇りうる市民的経験です。

人権と民主主義が花開く未来へ

今日では部落問題が人権と民主主義に関わる中心問題ではなくなりましたが、貧困や格差、ジェンダー問題、ＬＧＢＴＱや在日外国人の人権保障問題、年齢・特定の「能力」や障害・思想などによって人を差別し排除する問題が、社会から根絶されたとは言えず、広がりと深刻さを増しています。個人の生活や労働において、人間としての尊厳が脅かされ、暴力や紛争、社会不安などを引き起こしている現実があります。新型コロナウイルス禍は女性や子ども、高齢者などをふくむ社会的弱者を直撃し、新自由主義がもたらした社会保障の後退や自己責任論の誤りなど社会の脆弱さが明らかになりました。

しかし、他方でこれをただそうとする動きも力強くひろがっており、個を大切にし多様性を認めあう良識が市民のあいだに定着してきています。気候変動から地球環境を守る運動が未来に生きる若い世代から巻き起こっていることは大きな希望です。全国水平社創立１００周年を機に、すべての人の人権が尊重され、民主主義が根付いた、平和な社会の実現をめざし、地域から新たな連帯の輪を広げていくことを呼びかけます。

【事務局よりのお詫びとお知らせ】

・『燎原』２５２号郵送の際に、日本郵便にて配送事故が発生し、数名の会員諸氏に送られるべき『燎原』が返送されてきました。改めて今号と合わせお送りさせて頂きますので、ご容赦下さい。

・併せ、事務局の手違いにより、請求額を間違えたまま会費請求を行ってしまった事例が発生しました。ご指摘を頂いた会員各位に改めてお詫び申し上げるとともに、会費管理を事務局メンバー２人でおこなう改善策をとることとしました（沼本さんと中富さんに担当頂きます）。ご了解ください。

・２０２２年度総会、記念講演会、開催かどうかも含めて次号で案内します。４月16日の世話人会にて決定の予定です。

・会員消息についても次号に、『燎原』の合本「電子ブック版」第５巻（第２０１号～第２５０号）は５月連休明けに出来上がります。頒価はこれまでと同じ３０００円です。是非ご購入下さい。

【催しもの案内】

韓国人元ＢＣ級戦犯 李鶴来（イ ハンネ）さんの生涯に学ぶ＊「２・11集会」を「４・29集会」と合わせて実施　４月29日（金・祝）14時～、キャンパスプラザ京都第２講義室。講演＝同進会を応援する会世話人・大山美佐子さん

憲法集会in京都　５月３日（火・祝）14時45分～、円山野外音楽堂。講演＝ジャーナリスト金平茂紀さん、体験的「戦争をしていけない論」。

◇

全国水平社創立１００周年の記念事業実行委員会（http://zjr.sakura.ne.jp/zensui/）

記念動画＝部落問題の解決過程と到達点（約22分）

解放運動の担い手たち―戦前編その①

事務局＝ mizuki@cream.plala.or.jp

編集後記

▼桜花の季節は、こころうかれる。同時に、花粉症の身にとっては鼻がふさがる。

▼旅用自転車ランドナーで安楽壽院の三重塔をめで、木津川と宇治川と桂川の三川合流点の背割りの桜を見にゆく。平安末、鳥羽殿の北面の武士佐藤義清（西行法師）のひそみにならい、さくら紀行。

▼「願わくば花の下に春死なん／そのきさらぎの望月のころ」（西行）桜の下でおにぎりを食す。西行は陽暦３月30日（陰暦２月16日）に願いどうりに死んだとか。

▼在原業平をもじって返歌すれば、「世の中に絶えていくさのなかりせば、すべてこの世はのどけからまし」という気持ちになる。

▼さて、いくさをなくすためにも、まずは知事選の「事前投票」に往こう。

３頁掲載の声明の作成にあたって、世話人、編集部でのやりとりの際に、話題となった詩を紹介しておきます。

ひまわり

堀　泰雄

ウクライナの象徴　ひまわりよ、
爆風に耐え高く咲け。
よしんば大砲に撃たれても、
その種は地に散らばり、
また芽を出し花を咲かせる。
ひまわりは断固としてたたかう。
絶えることなくたたかう。
人間の尊厳、自由を求めて
ひまわりはたたかう。
独裁者よ、あなたは、
ひまわりを絶やすことはできない、
平和を愛する人々がいるこの世界から。

堀　恭雄　１９４１年生まれ、群馬県の高校教員（英語担当。父の影響でエスペラントをやり始め、この30年ほどは、日本を世界に紹介する活動をエスペラントで行っている。いつの間にか世界でも著名なエスペラント作家になってしまった。